

## 待遇表現としての「ご挨拶」について

川口 義一・坂本 恵・蒲谷 宏

【キーワード】待遇表現・あいさつ・「ご挨拶」・「集まり」・「立場」

### 0. はじめに

一般的に「あいさつ」と呼ばれている言語表現を、収集して分析してみると、二つの異なる種類<sup>1)</sup>のものが混在していることがわかる。その一方は、「おはよう」「さようなら」「おつかれさまでした」のように、出会いや別れのときに交換される、比較的短い定形語句表現のグループである。もう一方は、「卒業生総代のあいさつ」や「理事就任のあいさつ」のように、式典・会議などの特定の場面で行われる、比較的長いスピーチ形式の表現である。

この2種類の「あいさつ」は、形式的な長さ以外にも、相互に異なった特徴を見せるものである。＜定形型＞のものは、「交換される」というところに特徴があり、相互に発する対応形式も一定の表現類型の範囲にほぼ決まっています<sup>2)</sup>、自由な表現選択の余地はあまりない。また、基本的には一対一のコミュニケーションで使用されるが、相手は家族・友人から上司・恩師までさまざまであり、その相手や場の雰囲気によって表現もぞんざいなものから丁寧なものまで幅の広い丁寧さで使い分けられる。

一方の＜スピーチ型＞のものは、一部の場合<sup>3)</sup>を除いて「交換」は期待されておらず、通常一対多数のコミュニケーションで使用される。表現の形式は、一定の類型をとる傾向にはあるものの、比較的自由に選択の幅は広いが、ぞんざいな表現になることはほとんどなく、だいたいにおいて丁寧な表現に限定される。

このように、相互に異なる特徴を有する、この2種類の「あいさつ」表現は、この2種が相当程度に異なる性格のものであるという点も含めて、従来、待遇表現研究の立場から論じられることがほとんどなかったと言ってよい。筆者グループ<sup>4)</sup>は、これまで現代日本語の待遇表現体系の記述研究を続けてきているが、今回は前述の2種の「あいさつ」のうち、＜スピーチ型＞のものを取り上げて、ここでは何を記述することが要請されるかを考察していきたい。というのも、一対一の、決まった表現の交換である＜定形型あいさつ＞は、あいさつを交わすべき相手がいればだれでも行えるものであるのに対し、＜スピーチ型あいさつ＞は、事前に指名された人が行うことが多いことから分かるように、表現主体であるために一定の条件が必要であるということがあり、その条件について記述する研究上の必要があるためである。また、＜スピーチ型あいさつ＞は、ほとんど実質

的な意味の伝達を行わない<定形型あいさつ><sup>5)</sup>と異なり、一定の内容の伝達を目標とするものであるため、その内容がどのようなものであり得るかに関しての記述も要請される。この側面の分析は、<スピーチ型あいさつ>が、意見を述べるために行われるスピーチや自己紹介のスピーチなどと比べて、どこが異なるのかを明らかにするために必要であり、また日本語におけるスピーチ表現全体の体系記述のためにも有効となろう。

なお、本論では、<スピーチ型あいさつ>を「ご挨拶」という述語で呼んで、「あいさつ」と名付けられるべき<定形型あいさつ>と区別する。この命名は、<スピーチ型あいさつ>が硬い感じの丁重な表現によって表現されることの多いことを捉え、必ずしも丁重な表現を必要としない<定形型あいさつ>との対照をきわだたせるためのものである。

### 1. 待遇表現として捉えた「ご挨拶」

筆者グループは、現代日本語の待遇表現の体系記述を進めているが、その中で「待遇表現」というものを次のように規定している<sup>6)</sup>。

「待遇表現」とは、ある「表現意図」を持った「表現主体」が、「自分」・「相手」・「話題の人物」相互の「人間関係」や、「場」の状況を認識し、「表現形態」（「音声表現形態」あるいは「文字表現形態」）を考慮した上で、その「表現意図」を叶えるために、適切な「題材」・「内容」を選択し、適切な「言材」を用いることによって「文話」（「文章」あるいは「談話」）を構成し、「媒材化」する、といった一連の「表現行為」である。

今回取り上げる「ご挨拶」も、上記のような規定に当てはめ、そのいちいちの術語概念について論ずることが可能である。今、試みに、<友人の受賞祝賀会に招かれて、受賞者と同専門の友人としてスピーチをすることを依頼された大学教授>を設定し、この人物の「ご挨拶」が上記のような意味で「待遇表現」として記述可能な「表現行為」であることを見てみよう。

まず、この設定での「表現主体」である大学教授は、いかなる「表現意図」をもって「ご挨拶」という「表現行為」を行おうとしているのか。それは、<友人の受賞を祝う気持ちを伝えたい>ということである。ここで、注意すべきは、これだけの「表現意図」を実現することは、「ご挨拶」という行為を通してでなくとも可能であるということである。直接受賞者に電話でお祝いのご挨拶を伝えてもよいし、手紙を書くこともできる。「ご挨拶」の場合は、この「表現主体」が「選ばれて依頼されている」という側面が重要である。すなわち、「ご挨拶」の「表現主体」は「選ばれる」のである。したがって、どのような人が選ばれ

るかということが、「ご挨拶」では記述されなければならない。

さて、この大学教授は、上記の「表現意図」を「選抜された表現主体」として行うために、「人間関係」を考慮しなければならない。すると、「選抜された表現主体」としての「自分」が表現を行う「相手」というのは、友人である受賞者と同時に、祝賀会への参加者全員であることに気づく。すると、この「表現行為」は、一対多のコミュニケーションになるため、「内容」や「文話」の構成、使用する「敬語」などにも、受賞者だけに直接語りかける場合とは異なる制約が生じることが認識されるであろう。

このことは、「ご挨拶」が行われる「場」が「祝賀会」であることと関係する。つまり、この「表現主体」は、「受賞を祝う」という「表現行為」を「友人の代表／一人」という立場をとって、なおかつ会の進行の一部として行うことになるのである。ここで、前述の表現上の諸制約が再確認される。もちろん、この「祝賀会」の規模や参加者の顔触れによって、これらの制約をある程度調整する必要も生じ得るであろう。

この「ご挨拶」の「題材」は、「友人の受賞（を喜ぶ気持ち）」である。しかし、その「内容」となると「うれしさを表す」だけでは済まない可能性がある。まず、参加者に対して「表現主体」の自己紹介をする必要のある場合もあろうし、「自分」が「選抜された経緯」を説明する必要もあろう。「友人代表」としての「ご挨拶」ならば、自分だけがスピーチすることについての釈明も必要かもしれない。実質的内容の「うれしさを表す」ほうも、「自分」と受賞者との関係や受賞者の業績などについて若干のコメントが必要かと思われる。

このように複雑な内容を、参加者全員に等しく伝えようとすれば、使用すべき「言材」は一定以上の丁寧さ<sup>7)</sup>のあるものが選ばれる。具体的には、まず「敬語」の中から、各種の「尊重語」<sup>8)</sup>に加え、丁寧な語感の強い「丁寧語」のデゴザイマス・デアリマス、「丁寧語」のオル・イタス・マイル・申スなどが頻出することが予想され、そのような「敬語」の丁寧感と釣り合わせるために、一般語彙からもサクジツ（昨日）・～ニテなどの語が積極的に選ばれることとなる。

「内容」、使用する「言材」が見通せたところで、「文話」（この場合「音声表現形態」をとるので、口頭による「談話」）の構成を決めることになる。[あいさつ－自己紹介]と続けたあとすぐに「おめでとう」と言うか、「おめでとう」は最後か、受賞者との個人的なエピソードはどこに持ってくるかなど、受賞者・参加者のどちらにも違和感のないように組み立てなければならず、ここでも「人間関係」、「場」、「内容」などに配慮する必要があるだろう。

最終的な「媒材化」は、「談話」ゆえに「音声化」で行われるが、この際「表現主体」は、声の高低・話の速度・間の取り方などに配慮を払わなければならない。また、「待遇行動」としての表現時の服装・姿勢・態度などにも、以上すべの配慮の結果と適合する選択がなされることになる。

(12)

以上、この特定の「ご挨拶」という「表現行為」は、「待遇表現」（特に高いレベルの「敬語表現」）として捉えることが可能であり、その記述に際しては待遇表現の一般の記述に使用する枠組みがそのまま有効であることが分かる。以下、上述の〈受賞祝賀会〉の例を越えて、「ご挨拶」一般の待遇表現としての特徴を、「待遇表現の規定」で使用した枠組みを手段にして記述してみたい。その際に、その特徴として記述の中心にしなければならないことは〈「場」の性質〉・〈「表現主体」の「立場」〉・〈「内容」の選択・決定〉であると考えられる。以下、この3点について順に考察を進める。

## 2. 「ご挨拶」の「場」の性質

### 2-1. 「場」のレベル

「ご挨拶」は、「卒業式」や「講演会」のようないろいろな「集まり」で行われるものである。これらの「～式」「～会」と名付けられる「集まり」は、一般に、さまざまな目的のために、大勢の参加者が一堂に会するもので、「ご挨拶」はこれら大勢の人の前で行われるものである。したがって、たとえその参加者（すなわち「ご挨拶」の聴衆）が「自分」にとっては親しい人たちばかりであっても、その「集まり」自体はある程度公的な「場」となるし、場合によってはかなり改まった「場」となる。「表現行為」が行われる「場」を、その改まりの度合いによっていくつかのレベルに段階づけしてみると、通常の社会生活の場を「0レベル」とする<sup>9)</sup>と、これらの「集まり」で「ご挨拶」をする場合の「場」は、通常「+1」か「+2」だと考えることができる。一方、「-1」・「-2」で表されるくだけた「場」というと、「-1」が家族や親しい友人同士だけの〈誕生会〉〈歓送迎会〉、「-2」が親しい人同士での〈飲み会〉〈忘年会〉などのような「場」ということになる。ただし、親しい人が集まった〈飲み会〉においても、「幹事のご挨拶」の段階では、「0」あるいは場合によっては「+1」程度の「場」であることは、そのような「ご挨拶」が必ずしも非常にくだけた表現によって担われるわけではないことを見れば理解できる。このように、「ご挨拶」が一般的には「+1」以上の「場」で行われるということは、「待遇表現」としての「ご挨拶」の性質を大きく規定する条件となる。

### 2-2. 「ご挨拶」の行われる「集まり」

「ご挨拶」の行われる「集まり」はいろいろあるが、集まることの目的によって、これを以下の3タイプに分類することができる。

第一には、その「集まり」を開くこと自体が目的であるような「集まり」である。たとえば、〈入学式〉〈卒業式〉〈入社式〉〈授賞式〉〈結婚披露宴〉など、「式典」と言えるようなものがこれである。〈結婚式〉などの「祭礼」と言える

ようなものもこれに含まれよう。これらの式典類は、式全体がかなり格式張ったものであり、服装・態度などの非言語表現にもかなりフォーマリティの高いものが要求される。「場」のレベルは〔+2〕となる。

第二には、通常は飲食を伴う、出席者相互の歓談・懇親を目的としたような「集まり」がある。これらの「集まり」は大きく二つにわけられる。まず、何かある特定の目的のために開かれるタイプのものがある。例としては、〈祝賀会〉〈卒業記念パーティー〉〈謝恩会〉などがある。ある特定の目的とは主賓となるべき人がいて、その人を何らかの形で祝うということになることが多い。もちろん、祝われるのが人ではなく、組織であったり、建物などであったりする場合（〈新学部開設〉〈社屋落成〉などの記念パーティー）もあるが、それでも、それに関わる人を祝うことには変わりない。

一方、何かを祝うというような特別な名目を持たず、出席者同士の懇親だけを目的とした「集まり」もある。さまざまな形の懇親会がそれであり、〈歓送迎会〉などもその一種であろう。これのくだけた形が一般の〈飲み会〉であるが、その最初に行われる「幹事のあいさつ」などは「ご挨拶」に含まれると考えてよい。

以上、特定の目的のある「集まり」も、懇親中心のものも、すべて「パーティー型」と名付けておく。この型の「集まり」で「ご挨拶」の行われる「場」のレベルは、〔+2〕から〔0〕までが考えられる。

第三に、実質的な内容のある「集まり」がある。〈学会〉〈研究発表会〉をはじめとして、〈スピーチコンテスト〉〈討論会〉〈意見交換会〉さらには〈団交〉などもこれに含まれよう。この種の「集まり」を「研究発表会型」と呼んでおく。「研究発表会型」では、「開会／閉会の辞」といった、比較的形式的な内容の「談話」と、実質的な討論、発表などに関わる「談話」との間に性質の相違が見られる。実質的な討論場面における「談話」は、本稿で言う「ご挨拶」には当たらない。「研究発表会型」の「場」のレベルは、通常〔+1〕程度であろう。

### 3. 「表現主体」の「立場」

「ご挨拶」では、〈「表現主体」の「立場」〉の基準が記述の重点のひとつになるが、「表現主体」は多くの参加者の中から選抜されるために、まず種々の「集まり」における参加者がどのような人々であるか、次にその中からだれが選ばれるかを考えてみなければなるまい。

まず、「式典型」のものとは「パーティー型」のものを見てみよう。この種の「集まり」の参加者には、まず「主催者」が考えられる。次に、特定目的のある「パーティー型」では、祝われる対象の、「主賓」とも言うべき人がいる。また、一般の参加者とは立場の違った人が参加する場合もある。これを「ゲスト」とする。「ご挨拶」を行うべく選ばれるのは、通常、この「主催者」「主賓」「ゲスト

(14)

ト」および「一般参加者」という立場を負った参加者である。なお、一般の参加者の一部が主催者になったり、参加者のほとんどを占める人々が主賓の立場にありたりする場合も考えられる。

具体的な「集まり」を想定して、どのような人が「主催者」「主賓」「ゲスト」に当たるかを、表にして見てみると次のようになる。

なお、表中、「☆」は大多数の参加者であるものを示す。また、「発起人\*」のように示してあるものは、参加者のうち一部の人が発起人となっているような例（例えば、＜教授の退官記念パーティー＞では、教え子が参加者になるが、その一部が発起人となる）である。「？」は、例えば「＜クラスの飲み会＞に出席する担任教員」のように、必須の存在ではない参加者のあり得ることを示す。

### ① 式 典 型

形 態	主 催 者	主 賓	ゲ ス ト
入学式・卒業式	学校当局	入学生・卒業生☆	PTA会長など
授 賞 式	主催団体	受 賞 者	過去の受賞者など
創立記念式典	主 催 者	主 催 者	関 係 者

### ② パーティー型

形 態	主 催 者	主 賓	ゲ ス ト
披 露 宴	新郎新婦(の親)	新郎新婦 <sup>10)</sup>	招待出席者☆
受賞祝賀会	発 起 人*	受賞者など	受賞候補者・受賞者の友人など
卒業パーティー	学校当局	卒 業 生☆	学生が世話になった人など
謝 恩 会	卒 業 生☆	担当教師	?
国際交流パーティー	主催団体	参 加 者☆	役所関係者・顧問・地域文化人など
歓 送 迎 会	発 起 人*	新入者・転出者	(な し)
懇 親 会	発 起 人*	(な し)	?
飲 み 会	発 起 人*	(な し)	?

次に、「研究発表会型」のもの場合は、上記の2種と異なり、「主賓」に相当する参加者が想定しにくい。研究会会員の一部が「主催者」となるような場合は、主催者と参加者の区別はつきにくい。また、「ゲスト」が存在しない場合も多い。ただし、「研究発表会型」の一つである＜学会＞などでも、会場となる主催大学の人は一般の参加者とは立場が異なっていると言える。また、会場大学の学長などが学会のはじめに「ご挨拶」を行うような場合は、「ゲスト」の立場となるだろう。逆にそのような場合、一般会員は「ご挨拶」は行わないことが多いとも言える。また、公開の＜弁論大会＞のような実質的な会の場合、「ご挨拶」を行わない一般聴衆がいる場合も多い。一般聴衆から「ご挨拶」がでる場合は、

「ゲスト」の立場になると言える。「研究発表会型」の「集まり」についても、「ご挨拶」を行うべく選ばれる人を表にしてみると、以下のようになる。

### ③ 研究発表会型

形 態	主 催 者	主 賓	ゲ ス ト
日本語弁論大会	主催団体	弁 論 者	審査員、関係者など
研 究 会	主催団体	?	?
学 会	主催学会	?	(会場校の学長など)

## 4. 「内容」の選択・決定

### 4-1. 「表現主体」の「立場」との関係

以上のように、特定の「場」で特定の「表現主体」が「ご挨拶」を行うべく選抜されれば、その人物は「ご挨拶」の「内容」を選択・決定しなければならない。「ご挨拶」の「内容」は、その「表現主体」のその「場」における「立場」の違いによって異なってくるものと思われる。前述した「主催者」「主賓」「ゲスト」「一般参加者」という「立場」の違いに沿ってその「内容」を検討してみると、以下のようになるものと思われる。

主催者：来会への謝辞・会の趣旨説明・主賓の紹介・主賓に対する祝辞など  
 主 賓：会への祝辞・主催者に対する謝辞・自己紹介・感想・決意表明など  
 ゲスト：自己紹介・会への祝辞・主催者に対する謝辞・参加者(撰)に対することば(讃など)・会の社会的意義の顕彰など  
 一般参加者：(「ゲスト」の場合に類似)

「主催者」は、参加者全体に対し、当該の「集まり」の趣旨や進行方法について説明したり、「主賓」を紹介したり、「集まり」が盛会であることについて自分の感想を述べたりする必要がある。祝賀目的の「集まり」ならばお祝いのことばを、歓迎会であれば新参者に対する歓迎のことばをと、その目的に応じて「主賓」に向けてのメッセージを発するという役割を果たすことが期待されている。また、「ゲスト」や「一般参加者」に対して来臨への謝辞も必要となろう。

「主賓」の「ご挨拶」には、自分(たち)のために「集まり」を催してくれた「主催者」に対する謝辞が必要である。同時に、自己紹介をしたり、「集まり」に参加していることへの感想を述べたりする必要があることも多い。自分についての祝賀目的の「集まり」であれば、祝われていること自体について言及することは当然であるし、祝われるまでになるに至った経緯の説明、それについての感想なども明らかにすべきであろう。自らの今後の計画・姿勢について語れば、そ

れは決意表明になろう。歓迎会などでは、新たに迎えられる者として自己紹介は必要であるし、自分が受け入れられる組織について感想を述べたり、その組織での自分の位置を表明するものとしての決意表明をすることも必要になる。

「一般参加者」として「ご挨拶」に選抜されたら、最低「主賓」に対する祝辞や激励などは必須である。その上で、「集まり」への参加を促してくれたことに対する「主催者」への謝辞などが必要な場合もある。また、多数の参加者の中から代表として選抜されたような場合は、そのことについて言及する必要も出てくる。これは、「話をさせていただいて光栄です」のような謝辞になるか、「僣越ながら」のような、他の参加者に対する詫びの表現になるかの、いずれかであることが多い。

一方、「ゲスト」は、「一般参加者」とは立場の異なる自分が招かれているのはなぜかということに対する説明のことが必要な場合もあろう。その上で、「一般参加者」同様、「主賓」への激励、「主催者」に配慮した「集まり」に対するコメント（盛会であること、開催が意義深いことなど）や招待されたことへの謝辞などの内容の「ご挨拶」をすることが求められている。その際、「一般参加者」とは異なる立場が現れるような表現を用いることが歓迎されるであろう。

#### 4-2. 「集まり」の性格との関係

「集まり」の性格からも「ご挨拶」の「内容」の異なりを捉えることができる。「式典型」の場合は、複数の「立場」を担った参加者が「ご挨拶」を行うということ自体が会の進行の中心である。そのため、ある程度形式的に固定化された常用表現は併用されるものの、自分の個人的な感想や信条を述べたり、「主賓」に対して激励・助言を行ったりと、実質的な「内容」が盛り込まれることも多い。「パーティー型」で特定の目的のあるタイプのものも、「式典型」と類似する。

一方、「パーティー型」でも懇親目的のものは、「開会／閉会の挨拶」「主賓紹介」「乾杯の音頭」など、おおむね型式的な表現の羅列で済んでしまう場合が多い。また、「研究発表会型」も、実質的な発表・質疑応答・意見交換などの部分が「表現主体」の個性の出る内容であるのに比べて、「ご挨拶」の部分は「開会／閉会の挨拶」「発表者紹介」などに常用される、固定化した表現で十分なことが多いと言えよう。

### 5. 待遇表現としての「ご挨拶」の特徴

第2章から第4章までは、「ご挨拶」の＜「場」の性質＞＜「表現主体」の選抜＞＜「内容」の選択・決定＞について検討した。これによって、「ご挨拶」の成立にかかわる基本的な事項の記述が完了した。本章では、ここまでの検討結果を踏まえ、再び「待遇表現の規定」の枠組みを使って、「ご挨拶」表現一般の待



遇表現としての特徴を考察し、本論のまとめとしたい。

まず、「表現意図」であるが、これは<「場」の性質>と<「表現主体」の「立場」>の基準からしておのずと決まってくる。例えば、高等学校の<卒業式>における校長の「ご挨拶」について言えば、<卒業式>が「式典型」の会であり、校長が「表現主体」としては「主催者」となるということから、「ご挨拶」の「表現意図」は、「主賓（卒業する3年生）に対して祝辞・訓辞を与える」ということが中心になるはずである。また、地方都市<国際交流パーティー>における来賓待遇の地域文化人の場合は、特定目的のある「パーティー型」の集まりでの「ゲスト」として、「この国際交流活動の社会的意義を顕彰する」「地域の国際交流について進言する」などを「表現意図」とした「ご挨拶」を行うことになるであろう。すなわち、「ご挨拶」の「表現意図」は、「集まり」の性格とそこにおける「表現主体」の「立場」とで決定されることになる。さらに、考察を進めると、これらの「表現意図」は、最終的には「当該の集まりの進行・完遂に向けて参加者としてその役割の一部を担う」という「表現意図」に収斂する。これは個々の「表現主体」の「表現意図」というよりも、「ご挨拶」という表現類型に潜む原理的な「表現意図」であると言うことができよう。

選抜されたことで特定の「表現意図」を持った「表現主体」は、具体的な表現を構成する基礎として、「自分」を含めた「集まり」の参加者相互の人間関係と「場」の状況を認識しなければならない。「ご挨拶」における「人間関係」把握の特徴は、そのすべてが「集まり」という「場」を介して行われるということである。ということは、「表現主体」が「自分」を個人として捉えるのではなく、その「集まり」の趣旨の発現の一部を担う、特定の「立場」の持ち主として捉えるということになる。したがって、「ご挨拶」においては、「表現主体」の個人情報、その「立場」の表明に必要な量以上に表現せぬよう心がけなければならない。例えば、<受賞祝賀会>に受賞者の友人としてスピーチを求められた「ゲスト」は、「自分」と受賞者が、例えば幼なじみであるとか、大学の同期生であるとかいう、基本的な「自己紹介」（これが「自分」の「立場」の表明になる）以上の個人情報、（例えば家族や仕事についての詳細）を開示する必要はない。このことは、また反対に、特定の「立場」を持ちにくい参加者に「ご挨拶」を求めてはならないということを示唆する。

「表現主体」が「人間関係」について配慮しなければならないことのうち、もう一つ重要なことは、「自己卑下」である。第4章で見たように、「ご挨拶」の内容は、「祝辞」「謝辞」や「会の社会的意義の顕彰」などのように、その表現を向ける相手を敬語的に高くとらえて表現することが中心になる場合が多い。それはつまり、「相手」を「大きい／立派である／美しい」と捉えることであるが、同時に、その対照として「自分」を「小さい／卑小である／醜い」と捉えることにつながる。具体的な表現法で言えば、「相手」は徹底してほめ、持ち上げ、

(18)

そして決して批判しないことであり、それと相対的に「自分」を否定的に、へりくだって表現することになる。

次に、「題材」「内容」について見てみよう。「ご挨拶」の「題材」は、「集まり」の趣旨そのものが直接の「題材」になることが普通である。〈創立記念式典〉では、「当該機関・組織の創立」そのものが「題材」になり、ごくカジュアルなく飲み会〉では「飲んで談笑する」ということ自体が「題材」になる。「内容」については第4章で一覧したとおりであるが、どのような「内容」でもすべて最終的には肯定的に捉えて表現する必要がある。例えば、〈卒業式〉における校長の「ご挨拶」で卒業生在学中にあった不幸な事故や事件に言及する場合は、「誠に残念なことでした」だけで終わるのではなく、学生たちの「悲しみ・つらさを克服した勇気・努力」を讃える形で締めくくらなければならない。

また、いちいちの「内容」だけでなく、それらをどうつなげて「談話」を構成・展開するかということにも配慮しなければならない。例えば、人事異動に伴う〈歓送会〉で「主賓」となる転出者は、[あいさつ-自己紹介-転出への経緯-元の組織内の上司・同僚への感謝-転出先での任務に対する決意表明-今後の厚意への感謝-滑聴への感謝-終了の挨拶]のような展開を事前に組み立ててから「ご挨拶」を行うことになる。

「ご挨拶」に使用される「言材」、特に「敬語」は、第1章でも見たように、[レベル+1]以上の丁寧さが必要とされる。このレベルの高さは、「媒材化」(音声化)の際の声の高低(聞き取りやすい高さで)・話の速度(遅めに)・間の取り方(十分な間を取る)から服装(フォーマルに)・姿勢(脚は閉じて直立)・態度(穏やかで真摯な態度)にまで及ぶということは、同章で指摘したとおりである。

なお、英米社会における英語のスピーチなどと異なり、「ご挨拶」(特に「集まり」開始の部分で行われるもの)に必ずしもユーモアを示す必要はない。「場」の雰囲気にもよるが、一般的には「場」が改まりの方に傾いているため、「笑い」は好まれないものとなる。特に、「式典型」のものでは、「笑いをとる」ような「ご挨拶」は場合によってはふざけていると思われることもある。もちろん、カジュアルな、懇親だけが目的の「集まり」ではユーモアが歓迎されることもあり、また、「ゲスト」や「一般の参加者」の自己紹介・感想の部分では「笑い」が入ってもよいことがある。「集まり」の雰囲気を見誤らないことが肝心であろう。

## 6. おわりに

以上、「待遇表現」としての「ご挨拶」の特徴を検討し、記述してきた。その結果、「ご挨拶」とは特定の「集まり」の参加者が、その「集まり」における「表現主体」としての「立場」を表明することによって、当該の「集まり」の趣旨の発現と会の進行に協力する、という「表現意図」を有する「待遇表現」<sup>11)</sup>

であることが判明した。また、「ご挨拶」を行う際には、相当に多様かつ複雑な要素を考慮に入れているものであることも理解できた。

このような高度な表現行為が適切に行えるようになるためには、本論で示したような、「ご挨拶」の構造の枠組みが教材として示されたうえで、論理的に「文話」が組み立てられるような訓練が行わなければならない。筆者グループは、主として第二言語としての日本語教育への応用言語学的な関心から、本稿の研究を行っているのだが、このような研究成果は、日本語教育の場のみならず、口頭表現能力の養成に重点を置くようになってきた国語教育の分野にも応用されうると考える。

今回の「ご挨拶」分析は、抽象度の高い記述を得るために、主に筆者グループ内での内省をもとに行ったものであるが、今後は実際に行われた「ご挨拶」の録音・筆記資料を、可能ならば聴衆の反応なども含めて分析し、本論で試みた記述の妥当性を検証していきたいと思っている。

#### 【注】

- 1) 「あいさつ」と呼ばれているものには、外に、感謝・詫び・呼びかけなどの表現があるが、それらはここに言う「二つの種類」に含めない。このことについては、稿を改めて論じたい。
- 2) 「おはよう」「さようなら」のように同じ語句を交換するものと、「ただいまーおかえりなさい」「お元気ですかーおかげさまで」のように対になる語句で返答するものがある。
- 3) 団体相手の招待宴会のような場合で、ホスト側の歓迎の辞に対して、ゲスト側が答礼のあいさつを期待されているような場合。
- 4) 共著者の3名で「待遇表現研究会」を作り、共同研究を行っている。
- 5) <定形型あいさつ>は、「一定の形式を交換する」こと自体が表現の目標である。このような性格の表現を「形式伝え」と呼ぶ。一方、スピーチ・講義・ニュースのように特定の内容を持つ情報を伝達する表現を「知識・情報伝え」と呼んで区別する。
- 6) 蒲谷・川口・坂本(1994)参照。使用されている術語についての説明は、同文献を参照されたい。
- 7) この例の場合程度の丁寧さを、筆者グループは「+1レベル以上」と規定している。「敬語」の丁寧さのレベルについても、蒲谷・川口・坂本(1994)参照。
- 8) 従来 of 敬語分類における「尊敬語」「謙讓語」の一部。具体的な解説については、蒲谷・川口・坂本(1996)参照。

- 9)学校・勤務先・家庭などにおける、日常生活の「場」で、特に丁重な表現を心がける必要がない場合を想定している。このような「場」では、最低限、丁寧語のデス・マスを使用した文体の使用で、待遇表現上不都合が起こらずにコミュニケーションができる。このように、ここで言う「場」のレベルは、そこにおいて使用される「敬語」の丁寧さのレベルとパラレルになるように設定してある。詳細は、蒲谷・川口・坂本(1994)参照。
- 10)〈結婚披露宴〉は、「主催者」=新郎・新婦(の家)=「主賓」という参加者関係になっている点で特殊な「集まり」である。このため、「主催者」が「主賓」を称賛するという、他の「集まり」では当然行われるべきことができないので、この部分を担当する者として「媒酌人」を配置するのである。
- 11)筆者グループは、このように、表現内容が相手に理解されることを「表現意図」とするような表現の類型を「理解要請表現」と名づけている。本論で「ご挨拶」と対照させて述べた「あいさつ」も「理解要請表現」である。また、注5)に挙げた「形式伝え」と「知識・情報伝え」は、「理解要請表現」の下位カテゴリーである。なお、この術語およびその他の表現類型についての詳細は、坂本・川口・蒲谷(1994)参照。

#### 【参考文献】

- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1994)「待遇表現研究の構想」(『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第6号・早稲田大学日本語研究教育センター)
- 坂本恵・川口義一・蒲谷宏(1994)「「行動展開表現」について—待遇表現教育のための基礎的考察—」(『日本語教育』82号・日本語教育学会)
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1996)「「狭義敬語」の分類」(『早稲田日本語研究』第4号・早稲田大学国語学会)